広報 向日市

No.200

昭和54年4月1日

◎発行　向日市役所（京都府向日市寺戸町中野20）
◎編集　広報広聴課　◎電話　075(931)1111

まちのうごき

（3月1日現在）		（2月中）	
世帯数	15,016世帯	生れた人	62人
人口	50,591人	亡くなった人	14人
男	25,131人	転入した人	284人
女	25,460人	転出した人	349人

少年の自殺を考える

次の世代を背負って立つ少年少女が、ある日、自らの手で生命を断つ――子どもの自殺ほど、私たち大人にとって胸を突かれる衝撃はありません。

最近の傾向は、性格的にも明るく、何不自由なく育てられ、とても自殺など考えられない、いわゆる普通の子どもの自殺がふえています。

昨年一月～六月の間に、全国で四百五十三人の少年・少女が自殺しています。なぜそんなに死に急ぐのか――子どもの自殺について考えてみました。

子どもの心を読みとる努力を

一口に自殺といっても、その動機や背景はさまざまです。大人にとっては〝なぜ、そんなことで……〟と、理解しがたい一面もあるでしょう。

しかし、少年たちは、苦しみぬき、その結果、自らの生命を断ったのです。

その胸中たるや、察するに余りあります。

ふだんから、少年たちの心を読みとり、死に急ぐ気持ちを思いとどまらせるために、私たち大人は何をなすべきか――。

自殺のサインを見落とすな
周囲の人に助けを求める

少年の自殺は、日ごろ接している家族や学校の先生友だちも気づかないまま、何の前ぶれもなく突然起こる、と思われているようです。

しかし、あとになって考えてみると「そういえば話したいことがある、といっていた」とか「なんとなく無口になった」「顔色がさえなかった」など、いくつかの兆候に思い当たることが必ずあるといわれます。

自殺しようとする少年は、自殺によって現在のつらい状況から逃げ出したいと願う半面、どうにかして助かりたいという気持ちを強く持っています。それが「予告兆候」――つまり、自殺のサインとなって表れるのです。

子どもが訴えかけるサインを見逃さないためにも、家族や周囲の人は、日ごろから何でも話しあえる関係をつくることに努めてください。

さて、そのサインですが、「学校をやめたい」「もう家族の重荷にならなくてすみそう」「旅に出る」などの間接的表現に始まり、気分が沈みがちで顔色もさえず、いらだち、不眠、食欲不振などの兆候があらわれます。

さらに、「生きていてもつまらない」というような直接的なサインを出すようになり、日記やノートを焼き捨てるなど、身辺の整とんをするようになると、もはや危険なサインと考えてよいでしょう。

◆少年の自殺防止10則

1. 自殺のサインを見落すな
2. 子どもを孤独にするな
3. 死の教育をするな
4. 子どもの頭で考えよう
5. 家庭ではよく話し合う
6. 親は聞き役にまわれ
7. 夫婦は仲よくしよう
8. 子どもは模倣で育つ
9. しつけはふだんから
10. 親自身の性格を見直そう

データ・少年の自殺
女の子の自殺が増える

少年の自殺――ある少年は予告し、ある少女は快活にふるまい、ある少年ははんの小さな失敗に悩んでいた――。

そのどれもが、大人の目から見れば、必ずしも死と直結する動機とはいい難く理解の手がかりさえも見い出しえない場合が多いといわれます。大人の気持ちとは裏腹に、少年たちはなぜ死を選んだのか。

昨年の上半期（一月～六月）に発生した少年（十九歳未満）の自殺について、性別、動機など、その背景をまとめてみますと、次のとおりです。

▽総数　四百五十三人。

昭和五十二年の上半期に比べて二十二人、七・六％ふえています。

▽性別　男の子が二百九十八人、六六％、女の子は百五十五人、三四％。昭和五十二年の上半期に比べると、男の子の九人増に対し女の子は二十三人も多くなっています。

▽学年別　小学校から大学生までの二百十九人のうち、一番多いのは高校生の百四十六人で全体の六七％を占めています。次いで中学生の一八％（三十九人）で、中・高生合わせて八五％にもなります。また、小学生は四人、大学生は三十人となっています。

▽原因・動機別　トップは学校での問題で約三割。次いで男女関係の一六％、病気の一一％などとなっています。

温かい親子関係を

浜松医科大学
精神神経科教授　大原　健士郎

「自殺する子どもは、どうせ特殊なのだから」と、安易に片付けてしまいがちですが、それは大きな誤解です。

自殺は、ある意味で最も人間的な行為の一つです。子どもの自殺も例外ではありません。

このことを、家庭も学校もいま一度、真剣に考えてみる必要があります。

「子どもは子ども、親は親」――お互いの人格を尊重するという大義名分をいいことに、大人はあまりにも子どものことを知らなすぎるのではないでしょうか。

自殺しようとする子どもは、必ず〝サイン〟を出します。

「死にたい」「どうしていいかわからない」という直接的な表現から「夜ねむれない」「いらいらする」「食欲がない」といった間接的な意志表示まで。

しかし、追いつめられた子どもの〝救助サイン〟を読みとるには、ふだんから親子の人間関係を密にしておくことが必要です。

それには、まず親が、自分の家庭はこうあるべきだという、家庭づくりのビジョンを持つこと、これが第一です。その中で子どもとの人間関係をつくっていく。

テレビで「過保護はよくない」といったからといって、それを鵜のみにして、翌日から子どもに厳しくあたったりするのは愚の骨頂です。

子どもは、一人ひとりみんな違います。しつけは、日常の家庭づくりの流れの中で、その子にあった方法を見つけながらやっていく。これができて初めて、親としての資格があるといえるでしょう。

〝借りもの〟の画一的なしつけからは、本当の親子関係は生まれません。

温かい親子関係ができていれば、子どもは自殺しようなどとは思わないのです。

"死の教育"をしていないか
励ましがかえって重荷に

たとえば、受験勉強―。

〝死ぬ気になってやればできないことはない〟〝死んだ気になってやれ〟――などと励ましているつもりで、子どもを死へ追いやるような教育をしていないでしょうか。

聞いている方では〝そんなら死んだ方がましだ〟という気持ちになっているとも知らずに――。

大人は、死の恐怖を十分に知っているので〝死んだ気になって〟努力することは可能です。

しかし、子どもは死の意味、自殺の意味を十分理解しておらず、ただ、自殺の「行為」はテレビなどを見てよく知っています。これが怖いのです。

殺されたはずのタレントが、チャンネルを回すと、ちがう番組ではニコニコ笑いながら歌っている。

子どもは、目の前の苦痛から逃れるために自殺（の行為）を選ぶ　ということにもなりかねません。

自殺には、必ず〝準備状態〟があるといわれます。ふだん耳にしている〝死の教育〟が、潜在的に心の中にその影を落としていき、ある瞬間に自殺へとかりたてることになるのです。

小さな失敗を恐れさせず、もう一度困難に挑戦させるねばり強さを植えつけたいものです。

人生は、死んだつもりでやっても、期待通りの結果がいつも出るとは限らないのですから。

あなたも必ず投票しましょう

■今年は統一地方選挙の年です■

今年は、4年に一度の「統一地方選挙」の年です。

今回の統一地方選挙は、昭和22年に第一回統一地方選挙が行われて以来、九回目に当たります。

わたしたちの市においても、4月8日が京都府議会議員一般選挙の投票日、4月22日は市長選挙の投票日です。

選挙は、わたしたちの暮しの願いを政治に反映させる最大のチャンスであり、わたしたちの一票は暮しをよくするための貴重な〝意思表示〟です。

一票を大切に

ところが、最近、わたしたちのまちにおいても、この貴重な〝意思表示〟をあえて放棄する人が多くみられます。

過去3～4年間に行われた各種選挙のデーターによると、有権者の30～40％の市民が選挙権の行使を放棄しています。

選挙権は、わたしたち国民に与えられた大切な権利の一つです。と同時に選挙権を行使する義務もあります。

わたしたちはこの貴重な権利を放棄することなく、投票日には必ず一票を行使しましょう。

あなたの一票を大切に

■国際児童年のスローガン■　「どの子にも明るい未来としあわせを」